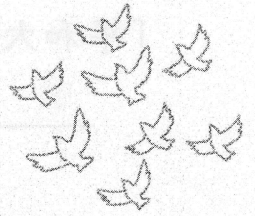


「平和大使として学んだこと」

「平和」の大切さ

江戸川台小学校 5年 氏名山本雄大



僕は平和大使として広島に派遣され、原爆や広島について、多くの事を知ることができた。これまでは、学校に行くと勉強をしたり、休日に友達と一緒に遊んだり、習い事に行きピアーを弾いたり、サッカーをすることが、当たり前だと思っていた。しかし、僕にとっての「当たり前」が当たり前ではない時代があった。一九四五年八月六日八時十五分広島に原子爆弾「リトルボーイ」が投下されたのだ。たった一つの原子爆弾により、多くの犠牲者がでて生き残った人も後遺症に苦しんだ。

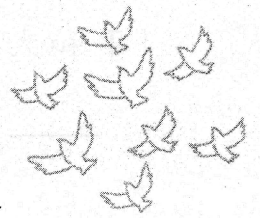
特に印象深かったのは、平和記念資料館だ。そこには当時銀行の入り口前で座っていた人の影の跡がついた「人影の石」や、亡くなった人の遺品がたくさん保管されている。その中には中身が残っているお弁当もあった。お母さんが一生懸命作ってくれたお弁当を、食べるのを楽しみにしながら亡くなったのだと思うな。想像したら悲しい気持ちになった。

僕は、平和大使を終えた今、被爆体験伝承者の入が言っていたように、ただ広島に行くと来ただけで終わるのではなく学んだことをきちんと友達や家族など身近な人たちから広めていきたい。そして、しっかりと後世の私たちの手で戦争や原爆のせいで一九四五年八月六日にこんな悲惨な事があったのだと伝えていくことが大事だと思う。このような悲惨な事が繰り返されないよう、戦争のない「平和」の実現に向けて、これから自分たちは何をしたらよいのだろうか。僕は核兵器の使用、貯蔵などを禁止し、核兵器廃絶に向けて、世界の全ての国が非核平和都市宣言をしたらよいのと思う。そのためには、この世界から核兵器だけでなく、戦争がなくなるのが、重要だ。

今もロシアやウクライナのように、世界には戦争が続いている国がある。これ以上犠牲者を増やさないよう、核兵器や戦争がなくなることを心から願っている。

「平和大使として学んだこと」

「願うだけではなく」



南流山第二小学校 五年 氏名 松川 美文

願うだけでは、平和はおとすれません。これは、広島で行われた平和記念式典で聞いた言葉です。この言葉を聞いて、私ははっとしました。それまでも私は、なんとなく平和を願っていたけど、平和をつくろうとはしていなかったからです。その言葉を聞いてから今でもずっと頭から離れません。

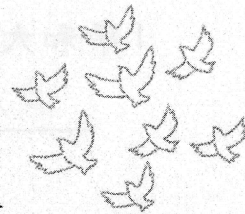
二〇二四年八月五日から六日、流山市の平和大使として私は広島へ行きました。広島に着くと、まずは被爆体験伝承者のお話を聞きに行きました。空襲警報が出されていたが、一九四五年八月六日、六歳だった岸田弘子さんは、飛行機の音を聞いて窓から空を見上げましたが、何も見えなかったそうです。でも、もしかんだ瞬間、大きな音がして爆風が吹き、弘子さんは土に埋まりました。家族は幸いにも無事で、弘子さんは助かったようです。次に、平和記念公園へ行き千羽鶴を献納してきました。折り鶴ブースの中にはたくさんさんの折り鶴があり、平和を願う人がたくさんいる

んだなと思いました。原爆ドームを見た時、焼けがれた跡があり、骨組みだけになっている部分があって、原爆の酷さを少しわかったような気がしました。二日目の八月六日、平和記念式典に参列し、原爆が落とされた八時十五分に黙とうを捧げました。平和記念資料館には、苦しみながらも自分の状態を書いた日記や、原爆によりボロボロになった洋服、高熱で溶けた瓦。原爆が落とされた様子を表した絵や写真がありました。絵には両手を前にならえのようにしている子どもたちがかかれています。手を下ろしているところ、焼けたただれた皮膚同士がくっついてしまっているのを見ました。原爆爆発の瞬間、落下中心地付近では三千度から四千度の高温だったそうです。知らなかったことを知るたびに驚き、もし自分が被爆者の立場だったらミと考えられないほど恐しくて怖い出来事でした。

二日間の広島ではいろいろなことを思った。感じたりしました。いつも学校に行けて普

「平和大使として学んだこと」

「願うだけじゃなく」

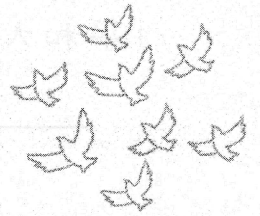


南流山第二小学校 五年 氏名 松川 美文

通に帰ってこられることが平和だと改めて気づきました。まだどうしたら平和をつくれるのかがよくわかりませんが、願うだけじゃなく、行動したいと思いました。

「平和大使として学んだこと」

伝えることのむずかしさ



流山小学校 5年 氏名小松雪璃

二〇二四年夏のある朝、天気は快晴、気温は二六・七度。小学校に登校した私は朝の会の最中に突然ピカッと光り、こまくがやぶれるほどの大きな音を聞いた。爆風でまどがうすび割れて体中をケがする同級生や熱線を受けてしまった友達がいる。私は無事だった。何が起きたか分からず、先生の指示にしたがうことしかできなかった。

しばらくして、妹のことを考えるが同じようにがんじょうな小学校の中にいるのできくと大丈夫。次に考えるのは父と母のことだ。連絡をとることができないので生きているかどうか不安だ。どんなことをしてても確認を取りたいが、朝九時ごろ油っぱいねばり気のある黒い雨が空からふり出した。

そして、学校にはケが人がおしよせて、周辺のつぶれた家では火事が起き始めた。これでは父と母を探しに行くこともできないし、さっき歩いて通学した道をもどして家で飼っている犬を見つけたすこともできないだろう。

う。不安な気持ちだけで何をどうしたらいいかわからなくなってしまう。

これは平和大使として広島に行き、平和記念資料館や被爆体験伝承者の方から学んだ私が想像した、原爆が落とされたある日のことだ。

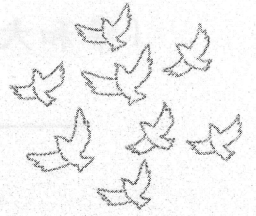
私は中々自分の気持ちをうまく言葉で表現することができなかった。なので、爆心地を流山市役所に設定して地図を使って被害エリアのきよりをはかったり自分の住んでいる町で原爆を体験した場合のことを想像してみることにした。なぜかという、実際に広島へ行ってみてきた島病院も相生橋もたてかわって、爆心地とは思えなかったからだ。相生橋は人や車が多くて当時も同じだとすると人的被害をねらったのだと思えた。だが、広島市の街なみも平和記念公園も同じようにきれいになっっており、七九年前の出来事が想像しづらかった。

だから、自分の町として考えればその時の

「平和大使として学んだこと」

伝えることのむずかしさ

流山小学校 5年 氏名小松雪璃



ことが想像しやすくなるのではないだろうか
と考えた。

と考えた。

実験として考えてみた。当時の人々が認
 も分からず混らんする気持ちや被爆した人の
 家族も思う気持ち。これからどうなってい
 か不安な気持ちなどがとても分かった。

も分からず混らんする気持ちや被爆した人の

家族を思いうち、これからどうなっていく

か不安な気持ちなでがとも分かった。

七九年の時間がたつて街が新しくなり被爆

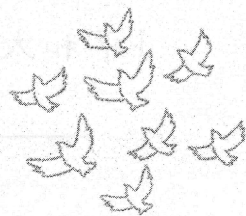
者が減って、記おくがうすれていつてしまふ

前に、原爆についてあまり知らない若い世代

の
人
に
私
の
よ
う
に
自
分
の
町
で
自
分
の
家
族
に
起

きた出来事のように知って考へてもらいたい

「平和大使として学んだこと」



西初石 小学校 6 年 氏名 大塚 莉那

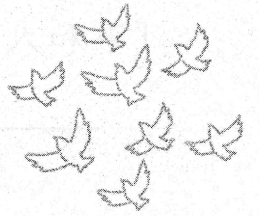
私はわかっていっているつもりでした。「平和であることが大切」「戦争はいけない」ということを。「原爆が日本に落とされた」という事実は知っていましたか？その恐ろしさについては今も知りませんでした。

今回、「平和大使」として初めて広島市の平和記念資料館に行き、原爆が落とされた当時の様子が書かれた絵や、原爆の恐ろしさを物語るたくさん人の遺品を見て、信じられない世界に衝撃を受けました。八時十五分で止まった時計を見て、その瞬間に爆発が起こったんだと改めて感じました。焼けて皮ふが垂れ下がっている絵を見て、胸が締め付けられ、その状況を想像もできませんでした。また、顔や腕に放射線障害の斑点が現れた人の写真を見て、原爆投下直後だけでなく、長い間、今もなお、後遺症などで苦しめられている人がいることを知りました。資料館の見学だけでなく、被爆伝承者の方からお話を聞きました。広島では流山市のみならず、折った千羽鶴

を献納しました。現在千羽鶴は「非核の象徴」「平和の象徴」とされています。その由来は広島平和記念公園の「原爆の子の像」のモデルになっ、ている佐々木貞子さんにあると言われています。佐々木貞子さんは二歳のときに白血病と診断されました。それから九ヶ月にわたる苦しい闘病生活の中で貞子さんは「千羽鶴を折ると願いが叶う」と信じて鶴を折り続けました。しかし、その願いは叶わず、貞子さんは十二歳で亡くなってしまいました。貞子さんの物語は広島市の市民に広く知られ、次第に世界中に広がっていきました。その後「原爆の子の像」が作られ、貞子さんの象徴でもある千羽鶴が「非核の象徴」「平和の象徴」として考へるようになったと言われている。実際に原爆を体験した被爆者の方が少なくなくなっています。私が平和大使として感じたことは、そんな今、今回講話をしてくださ

「平和大使として学んだこと」

戦争とは、



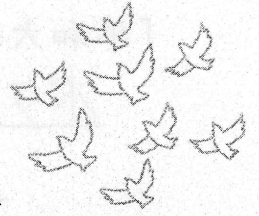
流山市立おおたか森小学校 6年 氏名 矢口 侑莉

私は、平和大使として初めて広島に行つて
涙山、勉強になりました。
まず、アメリカ軍が階雲に広島をねう、て
いるわけではなく、広島の大きなひがりを作
り出せる地形や味方の兵士がとじこめられて
いないということなど考えられたことだ、
たということ、また、日本は被害者であると
同時に加害者でもあること、資料館へ行つて
実際に見た、焼け焦げた弁当や服、三輪車な
どその当時使われていたものが生で見られた
ことです。79年前に起こった原爆は、人々の
生活や生き方を変えてしまいました。
戦争というものは、おそろしくて終わりが
見えない地獄のようなものです。岸田弘子さ
んの原爆を落とされた時の話を聞いて、弘子
さんのお兄ちゃんは一っすり思ひをずっーと
するのなら川にとびこんで死んだ方がいり、と
話していました。なぜなら、お兄ちゃんも、墓
をぬ、ても、ぬ、ても、治らず、悔しい気持
ちだったと思います。私は、話を聞くうちに

悲し気持ちになり、だんだん涙がでてき
まつになりました。戦争は、多くの人の悲し
みを生むものなのだと思います。もし、私
が当時広島にいたら、平和だった日常が一瞬
にしてなくなるこの恐しさはとも考えら
れません。当たり一面が火焼けになり、大切
な人を亡くし、それでも前を向かなければな
らないうちは、私にはとてもたえられない
ことだと思います。その、つらかった思ひを
何度もくり返し色々な人に伝え続ける岸田弘
子さんは改めて、すごい人だと思います。そ
して体験した人が少なくなる中、戦争の話や
その当時の様子を詳しく教えるくださる機会
を、頂けたことを、嬉しく思います。
「平和大使」を終えた今、私が強く思うの
は、これから戦争について考え続け、原爆
死没者は、何を伝えたか、たのかを深く知る
ことが大切だと思いました。
二度と、戦争をくり返さないためには、互
りがよく話し合いをすることも大切ですが、

「平和大使として学んだこと」

戦争とは、



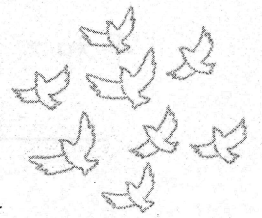
流山市立おがの森小学校 6年 氏名 矢口 侑莉

相手の気持ちを考えたリ、多くの人が、どれだけの悲しみを背負うことになるのかを、知ることだと思います。

今日は、平和大使として多くの体験をさせて頂く機会がとうございました。

「平和大使として学んだこと」

ボクの、みんなの、永遠の宿題



向小金 小学校 6年 氏名小川 侑え 助

「平和大使」としてのぼくの本当の任務は、これからの生活の中で今回の経験を活かし、友人や家族に伝言で思ったり、感じたりしたことを伝え、一人一人が平和とは何かを考へられるようにすることです。原爆による被害は色々あり、その中でも特に心にきざまれ、ているのは、子供達の被害です。原爆によって家族を失い、ひとりぼっちになったまま、た子供を「原爆孤児」といい、その数は二千人から六千五百人もいると言われています。

僕が通っている小学校には全校生徒を合わせ、六百八人程なので、原爆によって本当に多くの人、家族が失われたのだなと、心が苦しくなりました。原爆孤児の中には、施設に引き取られる子、行くところがなく道ばたで生活する子、生きていくためにくつをみかく仕事をする子、人の物をぬすむ子、死んでいく子、書いてはいるだけで涙が出してしまうような事が現実としておきていました。平和資料館では、見るのむづかしい悲惨な出来事が写真に

おさめられていました。

衣服は引き裂け、皮膚はたれさがり、声もたてず黙々と歩く人の姿。放射線は目に見えず、被爆からかなりの時間がたつた後に白血病などの「原爆症」になってしまふ子供が何人もいました。原爆はその時だけでなく、その後、後遺症としてずっと人々を苦しめ続ける最悪な兵器だと思いました。

ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世の言葉に、「ヒロシマを考えることは、核戦争を拒否することです。ヒロシマを考えることは平和に對しての責任をとることです。」という言葉があります。「核戦争を拒否すること」は、皆が今すぐ出来ることです。「平和に對しての責任をとること」は、僕にはまだどうすればいいのかわかりません。でも、分からないから終わりではなく、分からないから考え続けます。今から出来ること、これからも続けていくこと、平和について皆が考えていけるよう、僕も力になりたいと強く感じました。